

# A-Lab

archive

vol.12

A-Lab  Exhibition Vol. 10

まちの中の時間プロジェクト

## まちの記憶

田中 健作

**A-Lab**  
あまらぶ アートラボ

尼崎市

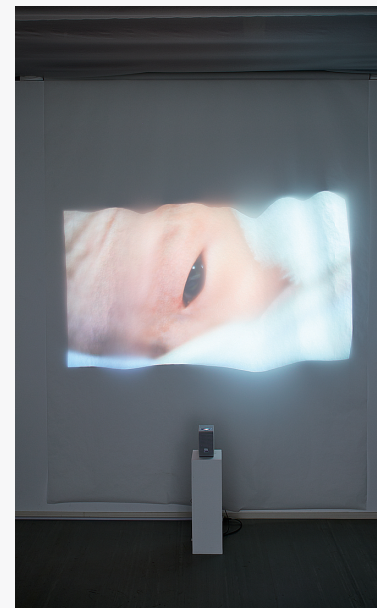
お問合せ先

尼崎市 シティプロモーション推進部 シティプロモーション事業担当

TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)

FAX : 06-6489-6793

E-mail : amalove.a.lab@gmail.com



A-Lab archive

A-Lab  Exhibition Vol. 10

まちの中の時間プロジェクト

# まちの記憶

---

## ■目次

「まちの記憶」 出展作品	03
「まちの記憶」 関連イベント	17
アーティストインタビュー	19
フライヤー・会場配布資料	20



田中 健作 Tanaka Kensaku

1987年生まれ、兵庫県尼崎市出身。これまで、マスメディアから得た情報と現場で感じたギャップをテーマにメディアを問わず作品を発表してきた。主な展覧会に2011年 個展 "Foot-and-Mouth Disease" みやざきアートセンター、宮崎 / 2014年 個展 "Tsunami Scars" ニコンプラザ仙台フォトギャラリー、宮城 / 2012年 個展 "The 4th Dali International Photography Exhibition" 日本館、大理・中国など。国内外で個展・グループ展多数。2012年には中国で開催された国際写真祭で、日本人として唯一 "Asia Pioneer Photographer Award" の10人に選出され、世界巡回展に参加。  
ウェブサイト <http://www.kensakutanaka.com>

## 繋がり の記憶



制作年:写真作品(590mm x 837mm)5 点は2010 年、その他の作品2017年

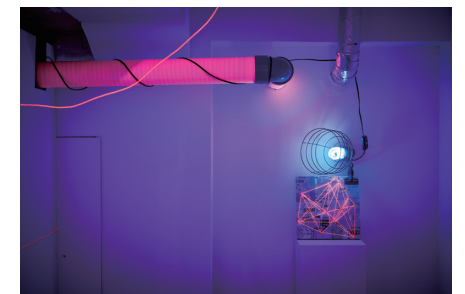
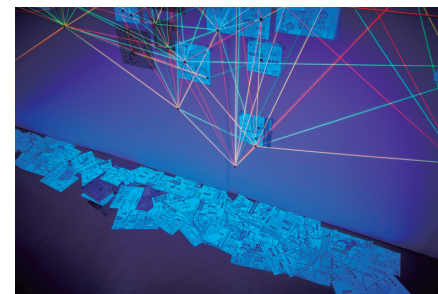
素材:映像、デジタルインクジェットプリント、木材、オーガージー、トレーシングペーパー、プロジェクター、スパイラルエルボ 90°、キセノンフラッシュランプ

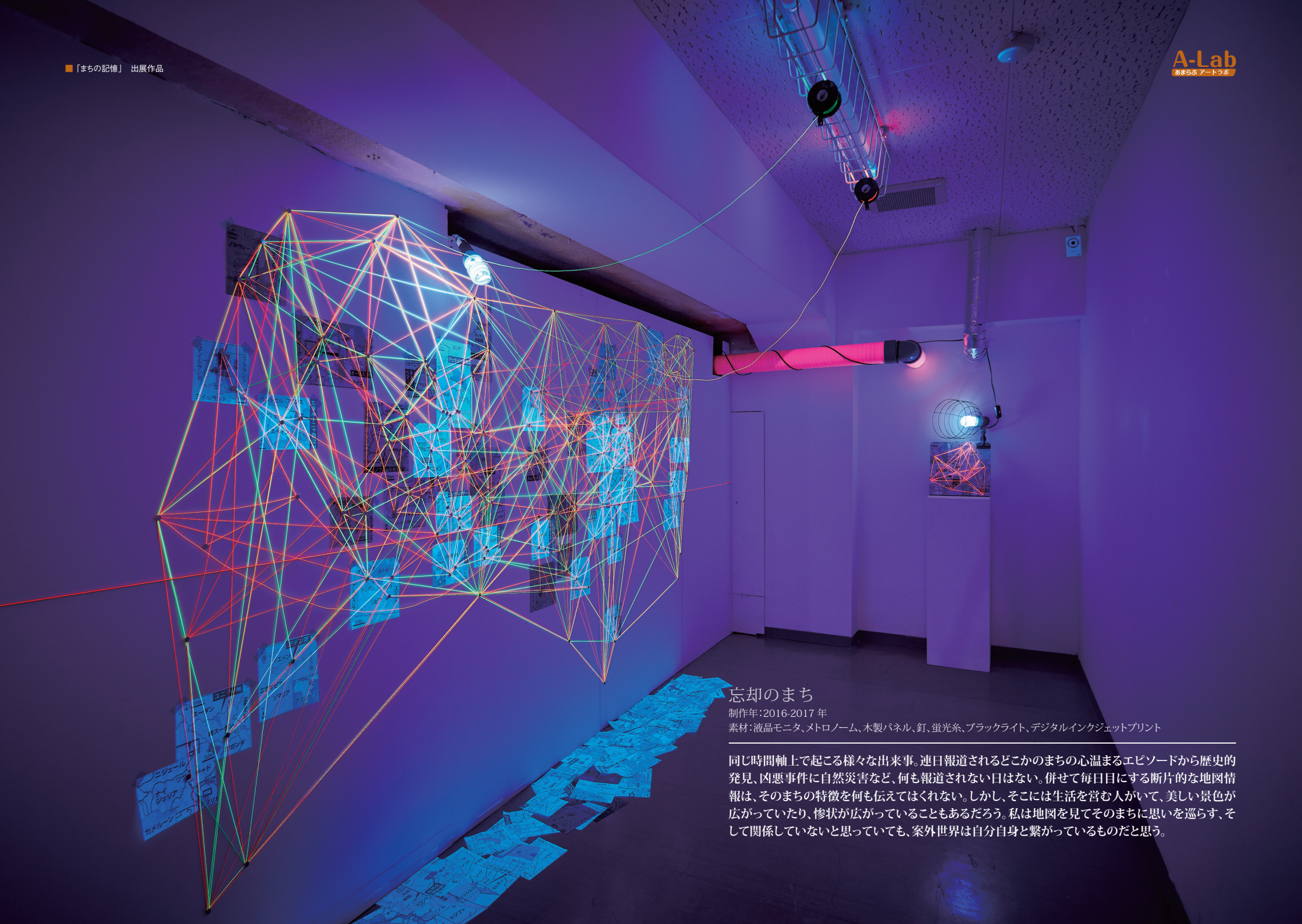
私たちは命の繋がりがあったから今の場にいる。作品「繋がり  
の記憶」はそんな当たり前のことを再認識  
する作品である。まちの歴史は数え切れないほどの人々が紡いできたもの。約6000年前は海底だった今  
日の尼崎も、時代と共に変容して今このときがある。特別なことではない、日常の風景から大切なことは何  
か考えるきっかけになる作品になればと思う。展示に使用されている写真、映像はすべて尼崎市内で撮影  
されたものである。





### 忘却のまち





## 忘却のまち

制作年:2016-2017年

素材:液晶モニター、メトロノーム、木製パネル、釘、蛍光糸、ブラックライト、デジタルインクジェットプリント

同じ時間軸上で起こる様々な出来事。連日報道されるどこかのまちの心温まるエピソードから歴史的発見、凶悪事件に自然災害など、何も報道されない日はない。併せて毎日目にする断片的な地図情報は、そのまちの特徴を何も伝えてはくれない。しかし、そこには生活を営む人がいて、美しい景色が広がっていたり、惨状が広がっていることもあるだろう。私は地図を見てそのまちに思いを巡らす、そして関係していないと思っても、案外世界は自分自身と繋がっているものだと思う。

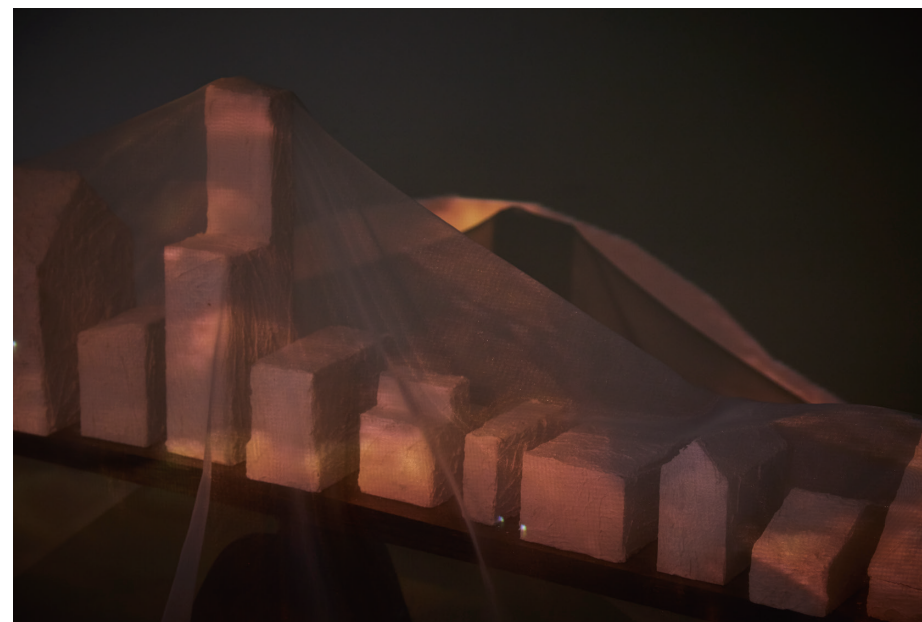
## 思い出のまちなみ



制作年:2017年

素材:漆喰、木材、LED ランプ、オーガンジー、プロジェクター、iPad

田中健作、北川淳一で制作した作品。記憶の中にあるまちなみをかたちに残そうと思った。ついこの間まではあったはずの、A-Lab から徒歩1分の市場が跡形もなく無くなっていった。おそらく、戸建て住宅が建ち並ぶのだろう。特別なことでない日常の風景、まちは刻一刻と変容していく。まちの変容は人為的なものあれば、大自然災害が要因の場合もある。思い出深いまちなみが無くなると、記憶の断片が欠けたような感覚に陥る。本作品はワークショップと連動しており、参加者は家をモチーフにした立体作品にプロジェクションマッピングを行う。





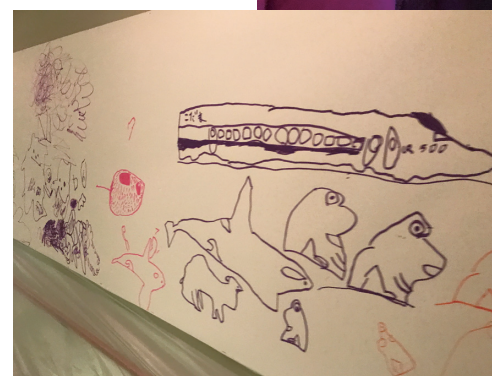


## 瞬間（とき）を想う



制作年:2017年  
素材:木材、映像(35分23秒)

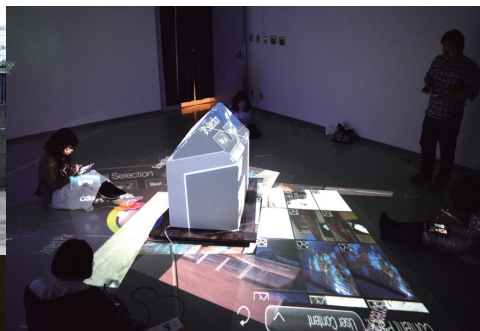
森岡厚次と田中健作のアーティストユニットLIFEISLIGHT(ライフイズライト)で制作した作品。LIFEISLIGHTは光をキーワードに、普遍的に流れる日常の時間に様々なアプローチの仕方で光を当て、作品を展開する。光は気づきの瞬間であったり、稲光のような刺激的なエネルギー、命の輝きなど様々なメッセージが込められている。会場内の和室空間に入った鑑賞者は、眩い光に照らされて何を思うか。海岸の映像は全て東日本大震災で甚大な被害を受けた海岸を撮影したもの。



## 「プロジェクションマッピングを身近に」

プロと一緒に尼崎をモチーフにした素材でデジタルアートに挑戦しました。

講師 北川淳一(メディアクリエイター)  
日時 平成29年10月21日(土) 13時から15時  
参加者数 4名



## 「思い出のシャボン玉」

市内で撮影した写真を使って、思い出とともに作品を制作しました。



## 「光る洞窟壁画」

施設内に洞窟が出現、光で浮かび上がる壁画をみんなで描きました。

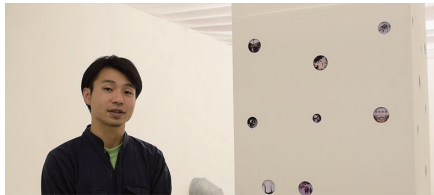
講師 LIFEISLIGHT  
(森岡厚次と田中健作のアートユニット)  
日時 平成29年11月5日(日) 12時から14時  
参加者数 23名



講師 麻野匠子(写真家)  
日時 平成29年10月28日(土) 12時から14時  
参加者数 7名



# アーティストインタビュー



田中健作さん

## これまでどのような作品を制作されましたか

これまでの作品に共通していることは、社会的な問題を扱っていることです。社会的な問題といっても、硬い内容ではなく、マスメディアが報道を通じて知らせてくれたことを、自分自身の足や目で、その場に行きフィールドワークを行うことで、報道で伝えられていた情報と現場とのギャップを、自分自身で確認し、そこから作品の着想を行います。

## なぜアーティストになろうと思ったのですか

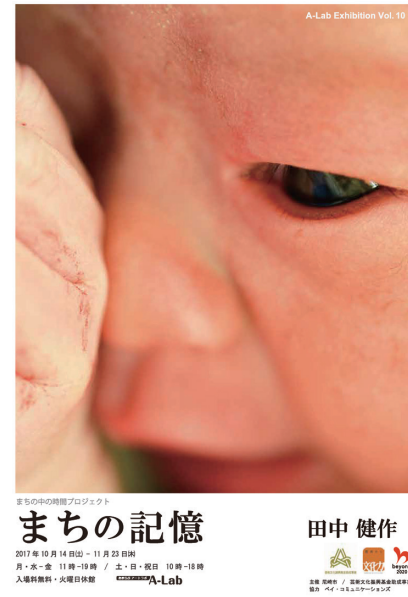
明確にアーティストを目指していたわけではなく、大学進学時は、フォトジャーナリストになりたかったりとか、その都度興味のあることに進んで行くと、今は「アーティスト」、作品を作る人が、今の自分にすごく合っています。作品を作っている時が、とても楽しい時間で、楽しいから続けられているんだと思います。

## 今回の作品を作ろうとしたきっかけは

この展覧会を行う前に、「まちの中の時間」というプロジェクトがありました。そのグループ展に参加してもらい、そこで参加した作家が一人づつ個展を行うという内容になっていました。その流れで、約一年間尼崎市内でリサーチや制作をしていきました。その作品を発表する機会が、今回の展覧会になります。

## 今回の展覧会について紹介してください

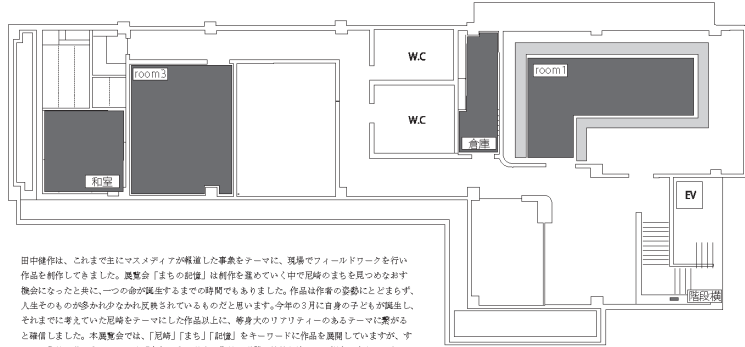
今回の展覧会のタイトルが「まちの記憶」。「まち」と「記憶」をテーマにした作品が展示されています。「まち」と「記憶」と言っても全てが尼崎をテーマにしているわけではありません。尼崎の写真を素材に使っていますが、鑑賞者が尼崎のまちだけでなく、まちという普遍的なイメージで作品を鑑賞していただける内容になっています。まちというものが刻一刻と変容していくものと思うのですが、今回の展覧会のテーマであり、変わった取り組みとなるのが、変化していく展覧会というものです。具体的にいうと、ワークショップに参加していただいた方の作品も、随時今回の展示に加えていきたいと考えています。参加者の方の作品が加えられることで、A-Labに興味を持ってもらったり、アートが身近になるきっかけになれば今回の展覧会は成功かなと思います。



まちの中の時間プロジェクト

# まちの記憶 田中健作

主催：尼崎市/協力：バイ・コミュニケーションズ



田中健作は、これまで主にマスメディアが報道した事象をテーマに、現地でフィールドワークを行い作品を制作してきました。展覧会「まちの記憶」は制作を進めていく中で尼崎のまちを見つめなおす機会になったと典に、一つの命が眠るまでの期間でもありました。作品は作者の姿勢にとどまらず、人生そのものが息づかひなれ反映されているものだと思います。今年の3月に自身の子どもが眠れず、それまでに考えていた尼崎をテーマにした作品以上に、尊厳のリアリティーのあるテーマに繋がること確信しました。本展覧会では、「尼崎」「まち」「記憶」をキーワードに作品を展覧していますが、すべての作品に共通するテーマは「命」です。過去の作品も形態、技法が違っても根拠に広がることに変わりはありません。

会期9/25-10/15 A-Lab

**room1** **《繋がり**の記憶》  
 制作年：写真作品 (996mm x 837mm) 5点は2010年、その他の作品2017年  
 素材：映像、デジタルインクジェットプリント、木材、オーガジー、トレンジングペーパー、プロジェクター、スバイラルエレガ 90°、キセノンフラッシュランプ  
 私たちは命の繋がりがあったから今この場にいる。作品「繋がりの記憶」はそんな当たり前のことを再認識する作品である。まちの歴史は数え切れないほどの人々が紡いできたもの。約6000年前は海蔵だった今日の尼崎も、時代と共に変容して今このときがある。特別なことではない、日常の風景から大切なことは何か考えるきっかけになる作品になればと思う。展示に使用されている写真、映像はすべて尼崎市内で撮影されたものである。

**room3** **《思い出**のまちなみ》  
 制作年：2017年  
 素材：漆喰、木材、LEDランプ、オーガジー、プロジェクター、iPad  
 田中健作、北川淳一で制作した作品。記憶の中にあるまちなみをかたちに残そうと思った。ついこの間まではあつたはずの、A-Lab から徒歩1分の市場が形もなくなり無くなっていった。おそらく、戸建で住むが建ち並ぶのだろう。特別なことでない日常の風景、まちは割と変容していく。まちの容姿は人為的なものもあれば、大自然災害が要因の場合もある。思い出深いまちなみが無くなると、記憶の断片が欠けたような感覚に陥る。本作品はワークショップと連動しており、参加者は家をモチーフにした立体作品にプロジェクションマッピングを行う。

**会期** **《忘却**のまち》  
 制作年：2016-2017年  
 素材：液晶モニタ、メトロノーム、木製パネル、画、蛍光灯、ブラックライト、デジタルインクジェットプリント  
 同じ時間軸上で起こる様々な出来事。連日報道されるどこかのまちのふもろあるエピソードから歴史の発見、凶悪事件に自然災害など、何も報道されない日はない。併せて毎日目にする断片的な地域情報は、そのまちの神髄を何も伝えてはくれない。しかし、そこには生活を書き手がいて、美しい景色が広がっていたり、惨状が広がっていることもあるだろう。私は地図を見てそのまちに思いを巡らす、そして関係してないかと思っても、案外世界は自分自身と繋がっているものだと思う。

**和室** **《瞬間**（とき）想う》  
 制作年：2017年  
 素材：木材、映像 (35分23秒)  
 森岡厚次と田中健作のアーティストユニット LIFEISLIGHT (ライフイズライト) で制作した作品。LIFEISLIGHT は光をキーワードに、普遍的に流れる時間に様々なアプローチの仕方日常を当て、作品を展開する。光は次ぎの瞬間であったり、箱のような限定的なエネルギー、命の輝きなど様々なメッセージが込められている。会場内の和室空間に入った鑑賞者は、眩い光に照らされて何を思うか。海岸の映像は全て東日本大震災で甚大な被害を受けた海岸を撮影したものである。

会期9/25-10/15  
 まちの記憶 田中健作

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.12  
 Exhibition vol.10「まちの記憶」

発行  
 編集  
 制作  
 撮影

尼崎市 シティプロモーション事業担当

賀集東悟 (表紙、P3～P15)